紹介

佐藤敏也著

『日本の古代米』

古代稲作農耕の存在を証明する場合、我々は遺物としてのイネそのものの確認を最大のよりどころとしている。

ところが考古学的遺物としてのイネの自然科学的研究の歴史はきわめて浅い。これまで、考古学者にとっては、遺跡から出土する植物遺体がイネであるかムギであるか、あるいはアワであるかさえわかればよいとされてきた。イネをより詳しく研究するといっても、戦前においては、せいぜいインド型であるか日本型であるかの追求程度にとどまっていた。

しかし、日本で栽培されたイネが、どこから導入され、その品種改良が如何になされたかの問題が研究の課題となるにいたって、イネ一般としての議論では不充分となり、遺跡出土米の品種の科学的な細かい研究が必要となった。

本書は、この課題にこたえるためのこれまでの研究を日本で初めてまとめたものである。本書第一～二章においては、研究の目的とこれまでの研究史が整理され、第三章では、世界のイネの中での日本のイネの特性がわかりやすく要約され、第四章では、日本におけるイネ栽培開始前の野生稲の存否論争が紹介されている。次いで第五章「日本の古代米」では、著者のこの十数年の研究のまとめが行われている。この章に最も多くの紙幅が費やされている。

著者の研究方法は、古代遺跡から出土する籾やコメ遺体そのもの、あるいは土器に圧痕として印された籾やコメの形態の観察から出発する。遺存状態の良好な資料の場合、籾の芒、イネの葉・茎も考察の対象となる。このうち、コメの形態特徴を表現するための計測データの統計的処理が最も基本的なものである。

ところが、この計測たるや容易な仕事ではない。私は五年前、古代稲作技術の研究のために、著者に教えを乞うた際、著者からコメの計測法の概要を教示して頂いたことがある。まずコメの遺体をピンセットを用いてひとつづつ、こわれないようにつまみ、大きいものから小さいものへ順に並べ、その長さと幅とを〇・一ミリの単位まで計測する。ふだん、なにげなく食べているコメ粒もこうして計測するとその長さは五ミリ前後から四ミリ前後まで、ずいんのバラツキを持っているものであることを知って驚いたことであった。

さて、著者のコメの計測的研究から導き出された最も大きな成果は、同じジャポニカタイプの古代米の中にも長粒のものと円粒のものとの二種類あることの発見である。著者はこれを手がかりに、各地各時代の遺跡出土米のコメの一括資料を一グループとして扱い、長粒と円粒との構成比を基準に二つのパターンを設けた。その結果、長粒が五〇%を越えるパターンが関東以西の弥生時代のものに多く、弥生時代末ないし、古墳時代以降、円粒が五〇%を越えるパターンが増えてくること、また、東北地方のものは後者のパターンを示すことが判明し

た。著者はこのパターンの差がイネの品種の差に対応すると考えている。この主張は我々考古学研究者にとっては有意義である。これまでにも、農具や水用立地などの研究から、弥生時代後期に農業技術革新の画期を考え得ることは指摘されていたし、現代のイネの品種分布から類推して、冷涼な地方での稲作開始のためには、感光性品種から、感温性品種への改良があったろうことは推測されてきた。

しかし著者の主張のように、コメ遺体そのものから、品種改良を証明できるとすれば、これほど強力な武器はないのである。

今後コメ遺体のデータは増加するであろうし、著者の提示した方法にもとづく、研究が進展すれば、コメ品種の地域差や改良の歩みはより詳細に判明することであろう。その点に、著者の研究の重要性がある。

本書ではこのほか、これまで何かにつけて論争の的となった中国河南省仰韶遺跡のコメ圧痕についてもストックホルムにある原資料を直接に分析した結果が報告されていて有益である。

巻末には著者の論述の証拠となったコメの計測値の基礎資料がすべて集録されているので、論述に疑問が生じた場合、読者は資料の処理そのものの検討から出発できるし、今後の新しいデータとの比較も可能なので、有益である。

土の中から出た一粒のコメも、自然科学的な研究によって、日本の歴史解明の重要なデータになることを本書は明らかにした。この研究法は古代史のみならず、中世史、近世史にも拡大されるべきであるし、その点で、考古学以外の専門家にも一読をすすめたい。

本書は、戦後における考古学と自然科学との共同研究の重要な成果の一つといえるが、この地道な研究を、軌道にのせてここまで推進された著者に敬意を表したい。

（A5版、三四六頁、図表多数、一九七一年一一月刊、『考古学選書』一、雄山閣発行、定価二〇〇〇円）

（都出比呂志）

関　俊彦編『東日本弥生時代遺跡地名表』——中部地方——

本書は中部地方の弥生式時代遺跡の地名表である。編者は、これまで既に、東北・関東両地方の地名表をまとめ、今後西日本のそれを企画しているとのことである。

本書の構成は中部地方所在の約三千箇所の弥生式時代の遺跡を県別にまとめ、所在地、遺跡の種類、出土遺物、参考文献の順に記述し、巻末には、地方別、遺跡別、遺物別、土器型式別の索引が付けられている。また、北陸、信濃、尾張三河の三地域別に、それぞれ、橋本澄夫、桐原健、増子康雄の三氏が研究動向の紹介を行なっている。

さて、ここ十年の「地域開発」による遺跡の破壊は全国をおおい、毎日のごとく、新しい遺跡が発見されている現状においては、研究者が自分の住む一府県の中においてさえ、新資料の発見を充分把握できない